



山本博之、『復興の文化空間学——ビッグデータと人道支援の時代』災害対応の地域研究 1. 京都大学学術出版会, 2014, viii+302p.

自分が調査研究で頻繁に訪れたり、長く滞在したりして、人々や環境のことをよく知っている場所が、突如として災害に見舞われた場合、我々は自分たち自身で何かできることはないか、と問わずにはいられなくなるであろう。よく知る現地の人々のために何かしてあげたいとか、これから支援活動に関わる人たちの助けになりたいとかいうことを考えずにはいられないものである。しかしながら、どこから手を付ければよいかかわからないことがしばしばであるし、結局何もすることができないこともある。さて、本書の著者である山本博之氏は、このように地域を知る地域研究者が災害にどう向き合うか、ということを実験的に考えてきて、『災害対応の地域研究』という概念を打ち出し、これまでの現場での経験や、学術調査・分析そして研究会等を通して得られた知見を、叢書シリーズとして出版した。その第 1 巻にあたるのが、本書である。山本氏は、京都大学地域研究統合情報センターの「災害対応の地域研究」プロジェクトをはじめとして、同分野の研究プロジェクトをいくつも実施しており、論文・書籍等での発表も多く、まさに第一人者といえる。

本書の構成は、「はじめに」に続いて、3 部構成で 9 章があり、そのあとに「おわりに」と「補論」がある。ここでは各章の内容を簡単に説明しつつ、特に興味深い部分について紹介していく。まず、「はじめに」は災害と復興をどう捉えるか、という問いに関して、地域研究の視点を中心に、さまざまな角度から論じながら、本書の意図と章構成が述べられる。それまでの膨大な経験と研究に基づいた著者の結論や、このテーマや被災地への思いが示される。

続いて第一部「情報と地域文化」に入り、第 1 章「災害情報を地図化する——スマトラ島沖地震・津波（二〇〇四年）」は、新聞報道における災

害と復興の情報を分析する手法として、それらを地図に載せることを紹介し、さらに地図上でも災害の違いに応じて 3 つのゾーンに分類して整理することで、新しいことが見えてきたことを紹介している。第 2 章「災害への関心を重ねる——スマトラ島沖地震・津波（二〇〇四年）・ニアス地震（二〇〇五年）」では、大災害の報に触れた山本氏らが復興関連情報のホームページを立ち上げて、特に日本人が現地で救援・支援活動をする時に役立ててもらおうとした経験が描かれる。ホームページへのアクセス記録と、現地メディアのニュース等を時系列的に分析しており、そこから復興過程における情報変化を明らかにし、情報提供の在り方について考えさせてくれる。第 3 章「誰が『地元』を語る？——ジャワ地震（二〇〇六年）」では、復興情報・防災情報などを提供するコミュニティペーパーに着目し、やはりそこに掲載される情報の分析をしているが、「立場に関わらず誰もが認める中立的な『正しさ』は存在しない」（p.104）ことを指摘し、そのことを理解しておく必要を述べている。第 4 章「『正しさ』が招く混乱——西ジャワ地震（二〇〇九年）」では巨大都市ジャカルタが地震を経験したときに市民がどう反応したかを、地方での場合と比べながらメディアでの情報を分析し、災害対応は全国一律ではなく、地域社会ごとや現場ごとでなされる必要性を述べている。これらの第一部 4 章に共通して、実に興味深いのは、情報を分類するということが、かつては情報不足が問題になりがちであったが、近年ではむしろ情報があふれており、逆にそこから必要な情報を抜き出すことが難しくなっている。本書では、防災・復興に役立つよう、情報をいかに分類するか試行錯誤した経緯を示しつつも、情報を地理的に分ける、時系列で分ける、キーワードで分ける、テーマで分ける、というそれぞれで見えてくるものが違うことを明確に示しており、これは他の地域や研究にも応用できる。

第二部「支援と格差、そして物語」の第 5 章「米を捨てる人——ベンクル地震（二〇〇七年）」では、メディアで報じられた被災地の問題の背景に、社会構造や歴史的経緯など地域の人にしかわからない問題が潜んでいたことを例にしつつ、地

域の人だからこそ解決できない軋轢を、外部の人が調整できる可能性を指摘している。第6章「尾根筋に住む——西スマトラ地震（二〇〇九年）」では、防災専門家の意見や支援団体の活動を見る中から、地域の特性を浮き彫りにしており、そのような「流動性が高い」社会に対応するよう、支援する側が柔軟な工夫を施す必要を述べている。第7章「浪費と駆け引き——スマトラ島沖地震・津波（二〇〇四年）」では、住民が外部からの支援をどう受け止めてきたかに着目し、災害直後とその3年後の違いや、国際支援団体と住民との軋轢を描いた映画などを例に出しながら、「住民参加型から住民納得型の支援へ」（p.197）と説く。これら第二部の3章を通して、著者は住民と援助団体、現場と本部などの橋渡しや調整をする役割の必要性に繰り返し言及しており、また「人道支援業界の外部の専門性」（p.196）の活用にも触れ、そここそ地域研究者の役割があると示唆している。

第三部「流動性と想像力」の第8章「人道支援とビッグデータ——物語や意味を掬い取る」では人道支援の在り方として、被災者が自分たちにあった支援者を選ぶ・活用するという視点について述べられている。またビッグデータ活用の可能性に触れたあと、「アチェ津波モバイル博物館」「アチェ津波アーカイブ」等の試みを紹介し、地域情報の「バックアップ」（p.228）、すなわち物理的なハードディスクの内容だけではなく、人々や地域の「物語」のバックアップをとる、という意義を述べている。第9章「そして日本——東日本大震災（二〇一一年）」では、日本人が日本の災害現場で支援に関わることで、言葉や文化を共有する者同士だからこそ分かり合えることや、逆にそこから起こる問題があることを論じ、そして日本でも地域ごと・人ごとの様々な物語があり、それはどれか一つが正しいというものではないことが述べられる。

「おわりに」では、これまでの章の要点を振り返りつつ、「地域研究的想像力」（pp.261-263）という言葉を使い、どこかの地域を深く知った経験があれば、それを応用して他の地域を訪れても自分と相手には異なる文脈・物語があることを想像できるようにすると説く。被災者も支援者もすべて

の人がこの想像力を持つことで、復興とともに歩む新しい物語を生み出していくことができるといふ理想が示される。その後にさらに、「補論 災害・復興研究の系譜——地域研究の視点から」があり、これまでの指摘を基に災害対応の地域研究の有意義さを論じている。

このように各章はとて興味深いものとなっているが、あえて短所として指摘したいのは、本書の副題と内容のギャップである。ビッグデータというのは、少し前までは扱うことができなかったほど膨大なデータのことであるが、技術の発達によりその収集・保存・解析が可能になってきている。SNSでの無数のつぶやき、カーナビのデータ、衛星観測のデータ、統計資料など様々な分野のデータを統合的に扱うもので、それは数百ギガバイトやペタバイトに達することもある。そのような膨大なデータから、意味をくみ取るには、解析技術としてのインフォマティクスが必要であり、その技術的發展もビッグデータの用語に含まれる。そういう観点からすると、本書で扱われているのは、ビッグデータを構成しているごくごく一部を、個別に取り扱ったに過ぎない。分析も特に新しいものではなく、個人の人力処理能力の域を出ないという感想である。本文中でビッグデータに触れられるのは、第8章のみで、その扱ひも小さい。したがって、副題を見た時には、「ビッグデータの地域研究」という新しい地平線が開拓されたことを期待して読み始めたものの、第一部の情報分類が有益であった他は、全体としては期待外れであった。したがって地域研究よりもビッグデータに関心の重さがある人には向かない。

また地域研究については、大いに考えさせられる点もある。冒頭に書いたように地域研究者は、調査地が災害に遭ったときには、自身の在り方に悩みを持つのだが、本書とは全く違う結論を出した例として、菅豊氏の『「新しい野の学問」の時代へ——知識生産と社会実践をつなぐために』[2013]がある。そこではまず東日本大震災の実例として、研究者が被災地を訪れ、研究と称して被災者を振り回し、負担をかけてきたことが引用される。研究者として住民を見る目線だけでなく、住民として研究者を見る目線もあるのである。菅

氏は、悩みつつも、伝統闘牛の勢子となって、新潟県中越地震を経験した小千谷市のフィールドに戻ることで、住民と同じ目線で世界を見ることにした。このような被災者からの目線というのは、本書で山本氏もたびたび触れており、全体を通してそこに寄り添う立場を示しているが、第8章のpp. 208-210では「役割交代——受援力を超えて」として、被災者のほうも役割を変える必要があること、つまり被災者自身も変わるべきことを指摘しており、研究者として住民を見た目線に他ならない。被災者を思い、胸が張り裂けるような思いをするのは皆同じとして、そのとき地域研究に実践的な意味を持たせて、それを行動に移せるというのは、誰にでもできるとは限らないし、それが唯一の答えとは限らないのではないか。しかし、それでは、自分は何ができるだろうか。地域研究者として災害への在り方について、良い意味で考えさせられることとなった。

「災害対応の地域研究」叢書シリーズは全5巻であり、2016年3月に刊行が完了しており、シリーズ全体でも様々な視点について学び、様々な立場から考えられるようになっていく。図表が多く用いられ、現地の写真もたくさんあり、理解しやすいように工夫されている。装丁にも工夫があり、全ページに、欄外に小さな写真があるのも好感がもてるほか、全5巻をそろえるとSTORYの重要さ、つまり本書でも繰り返し示された物語の重要さというメッセージが現れるようになっていく。災害と復興について理解を深めるため、被災地について学ぶため、地域研究者として災害・復興に役立つとするため、あるいは地域研究のあり方やその未来について考えるため、本書およびこのシリーズはとても有益なものである。このような関心をもつ方々に、広く読まれることが望まれる。

(古澤拓郎・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

参考文献

菅 豊. 2013. 『「新しい野の学問」の時代へ——知識生産と社会実践をつなぐために』東京：岩波書店.

西 芳実. 『災害復興で内戦を乗り越える——スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』災害対応の地域研究 2. 京都大学学術出版会, 2014, x+328p.

大きな自然災害は、人々の日常生活を中断させ、生存者に当該社会のあり方を再考させる。復興活動はそのため社会秩序の再建を伴う。近年の自然災害は、メディアで広くニュースが伝わり、外部世界から支援団体が多数参入し、復興活動を進展させる。2004年12月26日のスマトラ島沖地震・津波は、それを如実に語る。本書は、地震前からアチェが抱えていた社会的課題に着目しつつ、地震とその後の復興に向けての9年間の人々の歩みを綴る。

天然ガスなど豊かな資源を有するアチェでは、利益配分をめぐるインドネシア中央政府と確執が生じ、1976年より独立を唱える自由アチェ運動が展開していた。とりわけスハルト体制が崩壊した1998年以降、自由アチェ運動は活性化した。インドネシア政府は2003年アチェに非常事態を宣言し、独立派ゲリラ掃討のための軍事作戦を展開した。外部からの報道者や人道関係の支援者のアチェ入域は、厳しく制限された。こうした状況下、スマトラ島沖地震・津波がアチェを襲った。津波は、海岸部付近のコミュニティを破壊し、17万3千人の人々の命を奪った。生き残った人々は、自らの生存の意義をかみしめつつ、災害復興に取り組むこととなった。

本書は3部(9章)から構成される。第一部「紛争下の被災——津波が解く『囲い込み』」では、①アチェでは1907年に地震・津波に襲われながら、アチェの沿岸部の人々は津波の危険性について知らなかったのか、②2004年の地震・津波後の国際的な支援活動に対し、インドネシア国軍はなぜ、外国による支援活動を妨害しようとしたのか、③日本もそうした支援活動の一翼を担ったが、日本のNGOの緊急・復興支援はアチェにとって本当に意味があったのか、の3つの議論が展開される。

アチェは過去に津波を伴う地震を経験していたにもかかわらず、その経験は現在の人々に伝えら

れていなかった。なぜか、本書はそこには立ち入っていない。西海岸沖のシムル島ではそれが伝えられていたが、アチェの人々のなかには、地震後に海の水が引いて海岸に取り残された魚を捕りに行き、津波にのまれた人がいたことが指摘される。

またインドネシア国軍は、外部からの支援者が自由アチェ派と結びつくことを警戒していた。インドネシアだけでは復興支援を担いきれないため、外部世界からの支援を受け入れ、国軍はその活動や資金を独占的に管理しようとした。しかし、国際 NGO が大挙して訪れ、インドネシア政府が 2005 年に設置したアチェ・ニース復興再建庁が国内外の支援団体の連絡調整役となると、国軍は役割を後退させられたことが論じられる。また比較的規模の小さい日本の NGO の緊急・復興支援団体は、国軍との対決を避け、許可された範囲内で当初活動した。ただし、一旦活動を始めるとそこが人々の集う拠点となり、国軍が立ち入りを禁止した内陸地域からも人々が集まり始めた。ついに国軍は立ち入り禁止を解除せざるを得なかった。

こうして国内外の支援団体が活動するなかで、アチェ人がポスコ (posko: pos kordinasi の略称) という連絡詰所を設けて対応した興味深い事例が提示される。ポスコは、行政組織の一部として機能することもあれば、避難所の住民が自主的に設けたものも存在した。ポスコをとおして、地元の人々が外部の支援団体に囲い込まれることを避け、両者の協働により復興が始まったことを論じる。

第二部「復興再建期——世界と再び繋がるアチェ」では、①被災者たちが外国からの支援者を楽しそうに迎えていたのはなぜか、②津波の犠牲者はどのように埋葬され、どのように弔われたのか、③支援団体が建てた復興住宅に空き家が多く見られたのはなぜか、の 3 点が論じられる。

「津波で何もかも失ったのに、アチェの人たちはなぜみんな笑顔なんですか」と、著者はしばしば報道や人道支援に従事した人々から尋ねられたという。この問いは、本書を貫くテーマでもある。著者は、被災を契機にアチェが長らく直面していた孤立から解放され、多くの人々が出入りする社会になったことに、その答えを見出す。これは、

津波後のアチェ人の弔い方とも関係する。津波前の紛争下のアチェでは、行方不明者のものと思われる人骨が多数発見されても、人の死についておっぴらに語る事が憚られた。他方津波により多くの人命が失われ、一人一人の身元を確認できずに埋葬せざるを得なかったが、その死を社会で悼むことができるようになったことを著者は重視する。2009 年にオープンしたバンダアチェの津波博物館には、海の底を表したアッラーのもとに召された「昇天の間」が設けられた。アチェを訪れる観光客が、必ず立ち寄り場になったことが述べられる。

生き残った人々の新たなコミュニティ作りも始まった。支援団体は、12 万戸の住宅を用意した。しかし、復興住宅にははじめのうち、多くの空き家が見られた。再建された住宅に入居できるのは、権利者かその親族でなければならないとする支援団体の決まりを、住民が忠実に守ったためであった。その後支援団体が去り、住宅の譲渡や転用が可能になると、住民が入れ替わりながら復興住宅が活用されたことが明らかにされる。

第三部「社会の復興——災害で生まれる新しい社会」では、①インドネシアの他の地域の人々はアチェの被災をどのように受け止めたのか、②外国にいる私たちはアチェの経験をどのように知ることができるのか、③津波と復興を経てアチェの人々や社会はどのように変わったのか、を検討する。

スマトラ島沖地震・津波は、防災や緊急人道支援、被災地の復興が、国際社会の焦点課題になることを、他地域のインドネシア人にも認識させた。当初はスマトラ島沖地震・津波がアチェ人への天罰とみなしたインドネシア他地域の人々の間でも、遺体の収容や人道支援のため多数がアチェを訪れ、ボランティア (「レラワン」) として活動したことが論じられる。その後も 2006 年にジャワ地震、2009 年に西ジャワ地震と西スマトラ地震が起こるなかで、地震は人知を超えたものであり、災害は誰の身にも起こりうるとする出版物がインドネシアで増えたことを述べる。災害は被災者を選ばないため、誰もが災害に備えねばならないこと、災害後の対応の重要性と日頃から他地域の人々と良

好な関係を結ぶことの必要性を、インドネシア人が認識したことを明らかにする。

また復興再建庁が2009年に解散し、外部からの人道支援団体も撤退する一方で、かつて「メッカのベランダ」と呼ばれたアチェが、防災学の拠点となろうとしていることが論じられる。被災を契機として、アチェが抱えてきた課題を克服して新しい価値を創出し、世界に向けて発信しようとするアチェ人の姿を描く。デジタル化とデータベース化により、アチェに行かなくてもアチェの様子がある程度わかる仕組みが作られていることが述べられる。また津波と復興を経て、人道支援がアチェに持ち込んだ新しい考え方に馴染んだ津波後世代が登場していることを明らかにする。アチェでは、旧自由アチェ派が選挙で政治の表舞台に登場してイスラム信仰が強まるとともに、新たな世代の間で公平性や透明性が重視され出したことを指摘する。アチェ人が被災しながらも思いのほか明るかったのは、被災を契機に新しい関係を切り開くことに強い期待を寄せており、また支援のために現地入りした人々の活動が、アチェの人々の期待に応えつつあったことを理由とする。

本書は地域研究の視点から、アチェの抱えていた社会的課題に着目しつつ、地震・津波後いかに復興活動が進化したかを描く。被災が大きく報道されたことにより、外部世界の多くの支援団体がアチェに入域した。その結果内戦が終結し、外部の支援団体とアチェ人やインドネシア人の協働により復興への歩みが始まり、独立か統合かという二者択一的発想が後退したことが論じられる。外部支援団体の活動や被災者の動向さらにその後のアチェの復興過程を、政治的動向も踏まえ、丹念に明らかにする。すぐれた復興のドラマ作品とすら感じさせる。

著者は津波後、紛争によるアチェ社会内部の亀裂、外部世界との断絶、インドネシア他地域との亀裂が、修復されたことを説く。復興は被災前より良い状態を目指すものでなければならぬが、そのためにアチェと国民統合の関係や情報の扱いについてさらに検討する必要があるように思われる。

2004年の地震・津波は、国際社会の強い関心を

呼び、内戦は終息し、被災者への復興活動が集中的に展開した。外部世界に対応したインドネシア側の動向は、重要となる。外部の支援団体は、彼らと対応しきれない国軍ではなく、復興再建庁を窓口とした。インドネシアでは、復興再建庁で示されたような情報を集約して対応できる行政官が、そのプレゼンスを高めようとしている。自治権を強めたアチェにおける旧自由アチェ派の政治家と行政官の対立は、これを示唆する。自然災害は国家と関係なく発生し、国境を越えて被害をもたらすが、国民国家の枠組みを再認識させることもしばしばである。本書では、津波により逃げ惑う人々の姿や身元不明の並べられた死体が、繰り返しインドネシア国内のテレビで放映され、インドネシアの多くの人々が同胞の悲劇と捉え、遗体埋葬のためボランティアとしてアチェに入域したことが述べられている。インドネシアの国民統合が、再確認されたといえよう。こうしたなかで、アチェのワリ・ナングロ（アチェの主権継承者）と州旗をめぐる問題は、今後さらに大きな論点となるように思われる。

またこれまでの自然災害では、情報がしばしば困り込まれた。情報の偏りは、その後の防災対策に大きな影響を与える。上述のように、1907年にもアチェで地震・津波が起きた。当時はアチェ戦争（1873～1912）の最中であり、オランダ軍の特殊部隊が内陸部のアチェの抵抗軍を掃討中であった。内戦状態にあった点は、2004年と状況が類似する。1907年の津波について、古老の間で「もしイスラムを知る者がないがしろにされ、聖人が辱められるようなことがあれば、海の水が陸に上るという形でアッラーが罰を与える」と語られたことが、本書で示されている。当時津波に襲われた沿岸部は、既にオランダの影響下にあった。1907年の津波はアチェ人に、「異教徒」オランダと「敬虔なムスリム」アチェ人の対立図式を強化させたことがわかる。ただし天罰と了解すると、防災につながりにくい。アチェ戦争と距離をおいていたシムル島では、津波からの避難を歌うスモンが作り上げられ、今回の津波で犠牲者がほとんど出なかった。他方アチェでは大惨事となった。情報の伝達とともに解釈において、困り込まない

ことの重要性に改めて気づかされる。

アチェの社会復興は終息したわけではない。人々が解消しがたい苦悩や思いを混在させていることが、本書からうかがえる。若い世代の重視する「透明性」や「公平性」の価値観は、イスラムとどう関係づけられるのか、づけられないのか。また支援で交流した非イスラム世界をも含めた関係を、人々の世界観のなかにいかに練り込んでいくのか。それにそもそも、ともにアッラーを信じていたのに、一方は津波でアッラーのもとに召され、他方は生き残ったことの意義をどう理解し、防災への努力と結び付けていけばいいのか。また防災の必要性を認識しつつも、2012年に起きたアチェでの地震は、科学知識を有した人々を恐怖と不安におとし入れ、適切な避難行動から逸脱させた。なぜか。これらはいずれも、地域研究ならびに人文社会科学研究上の重要な論点となる。アチェの社会秩序の再建は、これからが正念場を迎えることになるだろう。

(弘末雅士・立教大学文学部)

牧 紀男：山本博之（編著）『国際協力と防災——つくる・よりそう・きたえる』災害対応の地域研究 3。京都大学学術出版会、2015、xvi+262p.

本書の基本的課題は、アジアの災害に対する回復力（レジリエンス）の強さを最大限に活かした「アジアの防災モデル」の構築を試みることである。評者にとり、本書の最も重要な視座と思えるのは、災害（自然災害のみでなく、紛争などの人為災害も含む）は社会に深刻な亀裂をもたらすという指摘であり、その亀裂の修復はいかにして可能なのかという問いである。そもそも近代という時代は、人々の間にさまざまな差異、対立、分断を生み出してきた。それに対し、社会、あるいは「社会的なもの（the social）」は、人々の間の統合と連帯を可能とする思想と制度として機能してきた。しかし、今日の災害は、新たなリスクとして社会に亀裂を生み、その修復の方法に関してはいかなる専門家であっても「正しい」処方箋を出すことが不可能な状況に私たちは生きている。そのような

混迷と不確実性の浸透する今日の世界において、災害によってもたらされた亀裂の修復に対し、「よそもの」が果たす役割を考察するのが本書の目的である。「よそもの」とは、「他の地域あるいは社会から来た人のことだが、当事者意識を持たずに無責任な関わり方をする人という意味ではなく、同時代に生きる者として当事者意識を持つ存在である。しかも、被災地の外に生活や活動の基盤があることから、支援活動に関わりやすく、被災地にはない物資や情報を提供できることに加え、地元のしがらみや利害関係がないために新たな考え方や方法をもたらしうる存在である」（p.242）。今日、災害の影響は国家の領域を超える広範な地域に及び、国民国家の枠組みをこえた「よそもの」の関与と連帯を可能にする枠組みの構築が急がれる。本書はそのような喫緊の課題に正面から取り組んでいる。

まず、本書の各章を概観してみよう。序章（牧紀男）では、本書が、いわゆる「世界標準防災モデル」が世界のどこでも適用可能という前提には立たないことが指摘される。日本は、「世界標準防災モデル」の完備によって災害に対する抵抗力を高めてきたが、その一方で失ったのは災害について自分で考え、備える能力としての回復力ではないかと問う。対照的に、東南アジアの途上国の人々は、被害は発生するものという前提で、したたかかつしなやかに対応する回復力の強さを持つ。このような回復力の強さを最大限に活かした「アジアの防災モデル」を構築することが本書の目的であると述べられる。

以下、本書は3部によって構成される。第一部「地域の抵抗力をつくる」では、2011年タイの大洪水災害（第1章）と2013年のフィリピン中部を襲った台風被害（第2章）を事例とし、自然災害と地域社会の関わりが論じられる。第二部「回復力によりそう」では、カンボジアの紛争（第3章）と2002年に独立した東ティモール（第4章）の事例から、紛争という人為災害とそこからの復興において、「よそもの」はどのように関われるのかが論じられる。第三部「支援力をきたえる」は、長年にわたりインドネシアの住宅政策への技術協力に関わってきた専門家（第5章）と、企業による

防災対応の専門家（第6章）による活動報告である。

第1章「水害は不平等に社会を襲う」（星川圭介）は、2011年に生じたタイの大洪水に関し、特に被害が集中したチャオプラヤーデルタを対象に、バンコク都心部とその近郊農村において、どのような地域対立が生じ、その亀裂がその後の治水対策にも影響を及ぼしているかを論じている。著者によれば、バンコク都市民の間では、「農村や郊外の人々は氾濫水と共存し受容するものだ」という観念があるという。そのような観念が、農村部を犠牲にしてバンコク都市民を洪水から守る輪中の存在をも正当化してきた。一方の農村の人々は、確かに「洪水はいつものことだから」とか「我々は洪水に慣れっこだから」と語り、その稲作も定期的な洪水に適応したものとなっていた。しかし、生業や生活の都市化が急速に進む中で、農村部の人々の洪水に対する捉え方も変化し、そのことが、治水対策をめぐる都市と農村の深刻な対立を生んでいるという。第2章「自然災害のリスクとともに生きる」（細田尚美）は、従来、「脆弱な国家」と考えられてきたフィリピンにおいて、災害時における公助が期待できない中、地方自治体、教会、NGOなどを中心とした共助の果たし得る可能性を論じている。

第3章「紛争とその後の復興が教えること」（小林知）は、社会的な原因にもとづく災害としての紛争に注目し、1970年から1993年まで継続したカンボジア紛争とその後の復興過程に焦点をあてている。特に、人々の心や対人関係の修復過程と、地雷などの武器の除去という側面に注目しつつ、公の裁判などの解決方法とは別の、他者への共感と配慮にもとづいた人間社会が本来的に備えている回復力にもとづく復興過程を論じている。第4章「『小さな物語』をつなぐ方法」（亀山恵理子）も、人為災害としての東ティモールのインドネシアからの独立をめぐる紛争を論じている。「いかに闘ったか」をめぐる、国家主導の公の語りと記憶が整備されていくなかで、個々の人々の経験の個別の意味づけ、あるいは「物語」は取り残されていく。亀裂が生じた社会の再生には、このような小さな個別の「物語」をつむぎ、記録していくこ

とが必要であることを論じている。

第5章「研究所の成長と共に歩む」（小林英之）は、インドネシア公共事業省人間居住研究所に対する住宅政策に関する技術協力のため、1984年から2007年の長期間にわたって専門家として活動した著者の経験を踏まえ、一外国人が災害に関わることの意味について考察している。第6章「災害でも止まらない社会へ」（小野高宏）では、日本企業のリスク対応戦略に関わる著者が、新たな防災の担い手としての役割が重要になる企業防災を論じている。2011年に生じた東日本大震災とタイの洪水災害を取り上げながら、効率化の進んだサプライチェーンほど災害に脆弱であり、むしろ「効率化」と同時に、いざというときに多様な選択肢を残すための「冗長性や代替性」を融合させることが災害に強い企業の事業環境をつくるという指摘は興味深い。

以上のような内容を持つ本書であるが、冒頭に記した本書の課題、すなわち災害を通して顕在化する社会の亀裂を修復するために「よそのもの」が果たし得る役割に関して、何が明らかになり、また何が課題として残ったのであろうか。第1章の星川の議論は、バンコク都市民が抱く「農村の人々は洪水に慣れているから問題ない」という見解を、当事者のものとして無批判に受け入れ、何もなさないことは、「よそのもの」の無責任さであるとする。なぜなら、そのような態度は、「氾濫水との共存」の名のもとに都市民と農村部住民との間にきわめて不公平な治水対策を生み出してきた現状を固定化することになるからである。むしろ、我々「よそのもの」にもとめられていることは、「過去の社会構造や既存の治水・利水の枠組みといったものにとらわれたタイ政府に対して疑問を呈し、現在のタイ社会に望まれる新しい治水構造を作り上げていくような議論を広くタイ国民の中に起こしていくことであろう」（pp.48-49）と論じる。この点は、本書の課題に対する、最も明快かつ具体的な提言であるように思える。一方、第2章の細田の議論は、災害時における公助の限界が指摘され、地域の人々の相互扶助を通じた共助の活性化が叫ばれる日本の現状と、公助が非常に脆弱ではあるが、人々のさまざまな助け合いの基盤が共

助の豊かさをもたらしているフィリピンの状況を対比的に論じている点が興味深い。フィリピン社会における共助は、とかく腐敗の温床とされる私的な紐帯にもとづく利益の分配としてのパトロンクライアント関係と表裏一体であり、従来はそのネガティブな側面が強調されてきた。しかし、地方自治体、教会、NGOなどのリーダーが有するネットワークを構築する力、すなわち「リンキング力」への注目は、公助に頼れない社会における共助の可能性を示唆している。また第4章は、紛争についての公的な記憶には回収され切らない小さな「物語」や、「苦難の経験がもつその人にとっての意味」を記録し、伝えていくのは、「内」と「外」の両方に働きかけられる位置にある「よそのの」にこそできることであると論じる (p.148)。さらに第3章では、カンボジアで活躍する日本人の地雷除去専門家の事例が、第5章では著者自身が「よそのの」でありながらも、インドネシアの震災復興における住居支援において果たした積極的役割が報告されている。

このように、本書では災害復興における「よそのの」の役割に関する様々な事例が提示されており、示唆に富む。しかしながらその一方で、「アジアの防災モデルの構想」という本書の目的のためには、「よそのの」の介入に関する個別の実践例のみでなく、むしろそのような介入を可能にしつつ、「よそのの」の活動の空間を広げていく構造的要因の解明こそが求められるのではなかろうか。たとえば第2章では、フィリピン・レイテ島の台風被災地の周辺地域の市長が災害支援に果たした役割が紹介されている。しかし、伝統的なパトロネージ・ポリティクス of 枠組みでは説明できない新たな政治的リーダーの輩出と活躍の意味を明らかにするためには、そのような個人の実践を拘束しつつも可能にする構造的要因の議論が不可欠となる。確かに本文中には、「1991年の地方分権化以降に顕著な、首長の政治手腕の変化も影響している」(p.73) という指摘はある。しかし、分権化の中での国家の後退という統治構造の枠組みに個別のリーダーの存在をより明確に位置づける作業が必要と思われる。本章の議論はそのような構造的要因よりも、むしろ現地社会における「困ってい

る人を見捨てずに助けようとする心」(p.61) や、「相互扶助精神の強さ」(p.79) など、きわめて一般性の高い(ある程度どこにでも存在する)規範や道徳が強調されている。むしろ求められるのは、個別地域社会の固有の構造的文脈に根差した共助の比較研究ではなかろうか。また、第3章の日本人地雷除去専門家の活動、第5章の震災復興社会における住宅支援の専門家の活動にしても、ユニークな個人の活動を可能にしている構造的背景は見えてこない。特に企業のリスク対策を検討する第6章では、国家、自治体、市民社会、コミュニティなど、災害による社会の亀裂を修復する諸アクターとのいかなる関係性や配置のもとに、企業防災の活動が可能になるのかという点に関する分析は見られない。

このような若干の疑問点は残るものの、本書は、特に評者のような東南アジア地域研究に携わる者にとっては興味深いものである。共編者の山本博之氏は、巻末のまとめにて、自身の調査地であるマレーシア・サバ州では、「日常生活でも政治経済でも出自が何らかの決定に影響を与えることはほとんどなく、たとえ外来者であろうともその場にどう貢献するかによって判断し受け入れるという社会であった」(p.242) という。そしてサバを含むマレーシアでは、「さまざまなよそのの当事者として関わることで社会が発展してきた」(p.243) と述べる。このような社会の特徴は、サバ州やマレーシアのみでなく、海域島嶼部を中心とした東南アジア社会にもある程度敷衍することが可能であろう。このような地域的特性に立脚することで、地域研究による災害・防災研究のさらに豊かな成果が生まれるであろう。

(関 恒樹・広島大学大学院国際協力研究科)

鈴木佑記、『現代の〈漂海民〉——津波後を生きる海民モーケンの民族誌』めこん、2016、346p.

本書『現代の〈漂海民〉——津波後を生きる海民モーケンの民族誌』は、著者の鈴木佑記氏(以下、「著者」と記)が2005年から2012年にかけてタイ南部スリン諸島を中心とするアンダマン海域

世界で断続的に実施した調査に基づき、現地に暮らす海民モーケンを扱った民族誌的な著作である。なお本書末の「初出一覧」によると、本書はもとも2012年に上智大学大学院外国語学研究科(現グローバル・スタディーズ研究科)地域研究専攻に提出した博士論文と、著者の複数の既発表論文をもとに大幅に加筆・修正したものとされる。

本書の「はじめに」でも記される通り、とくに著者は2004年のインド洋津波がモーケンの社会に及ぼした影響に主な焦点を当てている。より具体的に言えば本書は、津波災害を挟んだモーケン社会の長期的な変化に関する、同時代的な記録(と考察)という側面を有しており、その点で近年注目を集めている研究分野である「災害の人類学」(ないし「災害の地域研究」)の文脈においても興味深い著作となっている。

以下、本書の構成と内容の概略を簡単に紹介したい。まず序論の第1章は「災害の人類学」と題して、人類学や関連分野での「災害」をめぐる定義の考察からはじめる。そこでは自然災害においても人間社会・文化との相関が重要である点、また災害に関する当事者の視点からの研究という視点の重要性などを著者は確認していく。第2章ではいわゆる漂海民と呼ばれる集団に関する先行研究の系譜を批判的に再検討し、用語の問題についても再検討を行う。その結果、モーケンについては「漂海民」や「海人」「海洋民」などの誤解を招きやすいタームではなく、「海民」という表現を本書が採用していくことが確認される。

序論に続く本論は4部構成を成しており、それぞれ第1部「モーケンの概況」、第2部「津波被災前の生活世界」、第3部「津波をめぐる出来事」、第4部「国家との対峙」という表題が付いている。

このうち第1部はモーケンの暮らしているアンダマン海域の諸特徴、モーケンを含む民族集団などの概要が紹介されている。その中でもいわゆる大陸部東南アジアとされる地域における海域性という視点や、「海域世界」という分析枠組みに関しても、先行研究等を参照しながら述べられていく。モーケンや隣接集団に関しても西欧人やタイ人による先行研究を批判的に考察しながら著者自身の調査による知見も加味して、モーケンが隣接する、

ないし関係する諸集団といかなる関係にあるのか、その民族名称をめぐる問題等を含めて考察が行われる。

第2部では2004年インド洋津波が起こるより前のモーケンの社会文化のあり方を、文献資料や口述資料なども用いながら再構成していく。このうち1970年代までは、モーケンはまだ比較的自由にタイとビルマ間の国境を越えて海上を移動し、海産物採取を行っていたことが指摘される。ただし第2部の後半では、総じて1980年代以降は、タイ政府の進めるアンダマン海域の国立公園化(とそれに伴う観光化)の影響により、モーケン自身も定住化が進んでいく過程が詳しく記述されていく。

第3部は、本書全体の中心的な主題でもあるインド洋津波という出来事とモーケン社会の関係が詳細に検討される。とりわけ第8章で著者は、「〈災害〉の経験」と題して、インド洋津波とはそもそもモーケンにとっては何であったのかを、言わば当事者の視点から詳細に検討している。その概略を述べれば、実は発災当時において現地のモーケンでは必ずしも近代科学的な意味での「津波」や「災害」という概念を持ち合わせておらず、「津波を予知して避難した」と当時、メディアで報道されたエピソードも、当時の当事者にとっては「ラブーン(洪水神話における洪水)」をめぐる出来事として解釈されたことなどが指摘される。

第9章では津波前と後の変化のありようを、モーケンの家屋(ないし伝統的には住まいであった家船)に注目しながら考察する。第10章ではナマコ漁を事例として、津波災害後の漁の変化を詳しく述べている。そこでは特に国立公園の事務所側と、その監視の目をすり抜けてモーケンの漁師が「密漁」を試みる様子や、新たな技術導入などで対応していく様子なども詳しく描かれている。

第4部では、モーケンと国家との関係やその変化の様子が主題となる。第11章では、既にこれまでも何度か登場したアクターである国立公園の事務所とモーケンの緊張関係が大きなテーマとなっている。第12章ではタイの外部へのモーケンの移動などを通じて、彼らの外部世界との関係を述べる。概してタイとビルマ、インドなどの間の国境管理は、以前に比べて厳しさを増しつつある

様子が描かれている。とりわけ「モーケンが国境や国籍を意識しながら移動している、あるいは移動しないという事実」が現在のモーケンを取り巻く重要な点として確認される。第13章でも国籍や市民証の有無などを柱とする国家への包摂（や排除）が、現代を生きるモーケンにとって看過できない重要な要素となりつつあることが指摘される。結論の第14章では、著者はここまでの議論を踏まえ、津波後に大きく変容しつつあるモーケンを取り巻く社会状況に関して総括的な検討を行うと同時に、災害研究における研究者の立ち位置の問題についても考察を加えている。

以上が本書の各部ごとの大まかな概要である。このほかに本書には、必ずしも本論の各章に直接的には対応はしないものの、著者が一連の現地調査の過程などで感じた印象的な出来事などを扱った比較的短い4本のコラムが取められている。

ここからは、本書に関して評者が特に重要と思うポイントや本書の意義などを述べたい。評者の見るところ、本書の意義は、大きく分けて以下の二つの研究領域の文脈でそれぞれ指摘することができる。すなわち、一つ目は（とくに東南アジアの）海民ないし海域世界に関する研究の文脈、二つ目は災害人類学（ないし災害の地域研究）の文脈である。

このうち、まず前者から述べたい。海民（ないし海人、漂海民などを含む）研究に関しては、著者自身が先行研究のレビューでも述べているように、日本に限っても羽原又吉らをはじめとする系譜がある。東南アジアの海民に関する人類学的研究に目を向ければ、代表的なものに限っても海外では A. Nimmo や C. Sather、日本でも秋道智彌をはじめ青山和佳、小野林太郎、長津一史や評者などを含めた研究の蓄積を挙げることができる。

ただし、こうしたアジアの海民研究の系譜を見ても、アングマン海域世界のモーケンを対象とする民族誌的研究は（例えばスルー海域世界のサマ人を扱った研究等に比べて）相対的に乏しく、とりわけインド洋津波の前後を含めた現代的状況におけるモーケン社会を正面から扱った研究は、海外まで含めてもまだまだ研究が遅れていた領域であり、その意味で本書はこの分野での貴重な貢

献である。

次に災害人類学（災害の地域研究）の文脈でも、本書は興味深い論点をいくつも提供しているように評者には思える。例を挙げれば、近年の人類学的な災害研究では、現地社会の持つ伝統や在来知による災害への予防や対応を称揚する視点が提唱されている。これ自体は評者も少なからず賛同する論点ではあるが、本書の第3部を読めば、例えばモーケンの〈津波〉への予知や対応（とメディアなどで紹介されたエピソード）は、実際の現地の語りや解釈とは少なからぬズレもあることが指摘されている。つまり安易に近代的な災害観を適応することへの落とし穴を本書は気づかせてくれる。また、人文系の防災研究で欠落しがちな、ソフト面だけではなくハード面の重要性（コラム3）も、ともすると看過されがちな重要な論点であろう。

こうして本書は、海民研究、災害人類学の両方の文脈において、いずれも貴重な貢献を行った研究だと高く評価できるだろう。ただし、若干の気になる点がないわけではない。

まず最初に、些細な点ではあるが、本書のタイトルでの用語の選択にはやや違和感が残った。というのも、先に紹介したように、著者は序論でわざわざ、「漂海民」（ないし「海人」「海洋民」という用語は誤解を招きやすく不適切であると主張し、その上で、本書ではモーケンを「海民」という（より学問的に正確で適切な）概念で描くという議論を周到に展開している。にもかかわらず、本書の表題では、「海民」はサブタイトルの位置に留まり、メインタイトルでは〈漂海民〉が（ヤマカッコつきではあるとは言え）用いられている点は、本文中での議論との関係が少し分かりにくいようにも感じた。

また内容面では、先行研究への参照ないし批判を踏まえての自論の展開という点では、若干の不十分さが残るようにも感じた。例えば国家と海民の関係性、とりわけ現代の海民が、実は国境や国籍を非常に意識しながら（場合によっては国境を逆手に取って）移動や越境的実践を行ってきたという点は、拙著〔床呂1999等〕でも中心的な論点として問題提起をしたつもりであるが、序論で一

言程度触れ (p.40) た後ではほとんど本格的な議論や考察の対象にはされていない。すなわち、海民に関する評者を含む先行研究で指摘された論点と、本書の扱うモーケンと国家の関係の事例との間にいかなる違いがあるのか (ないのか)、などの議論が必ずしも十分に展開されていないように感じるのは少し残念な点であった。

また海域世界という枠組みや視点をめぐる議論の箇所 (pp.53-57) においても、スルー諸島を中心とするスルー海域世界 (ないし Warren の言う Sulu Zone) に関する議論 [Warren 1981; 床呂 1999 等] が、やはりほとんど参照されていないという点も、同様の欠落として指摘できるだろう。

しかしながら、こうした若干の気になる点は存在するものの、本書が東南アジアの海民研究はもとより、人文系の災害研究の文脈などにおいて極めて興味深い貴重な貢献であることには何ら疑問がない。著者による今後の研究のさらなる展開を大いに期待したい。

(床呂郁哉・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

参考文献

- 床呂郁哉. 1999. 『越境 —— スルー海域世界から』東京: 岩波書店.
- Warren, J. F. 1981. *The Sulu Zone 1768-1898: The Dynamics of External Trade, Slavery and Ethnicity in the Transformation of a Southeast Asian Maritime State*. Singapore: Singapore University Press.

福浦一男. 『霊媒のいる街——北タイ, チェンマイの宗教復興』春風社, 2016, 285p.

2014年に京都大学文学研究科に提出された博士論文の加筆・修正版である本書は、北タイのチェンマイ県およびその周辺地域における2001年から2年間の長期フィールドワーク、およびそれ以降2015年までの間に21回も実施された短期フィールドワークに基づく労作である。この15年間に目覚ましい社会的・経済的変動を遂げたチェンマイ

において、毎日のようにどこかで実践されているという霊媒術について記述した民族誌である。

本書は全8章から構成される。序章「タイの宗教と社会変動」では、近代化・グローバル化と新たな宗教現象に関する人類学的議論が批判的に検討されたうえで、現代タイ社会における宗教現象、およびチェンマイの社会変動と霊媒術の興隆が概観され、本書の視座が示される。人類学では1990年代ごろから主にアフリカをフィールドとして、呪術や妖術の興隆とモダニティとの関係が盛んに論じられてきた。一方、こうした研究に対しては、現代世界で生起する様々な宗教現象を、近代化やグローバル化に伴う不平等や不確実性の拡大等に対するリアクションとして一律に論じているとの批判がある。著者はこうした議論をふまえ、チェンマイの霊媒術の記述と考察を通して、宗教現象をいわゆる「聖なるもの」として孤立的・個別的に論じる立場も、それらを一律にグローバル化の影響に還元する見方をも乗り越えることを目指す。その際、著者は「コミュニティの成員が重要とみなすやり方で既存の文化的慣習を変化させる人間の諸活動」としての「創造性」(creativity)に着目する。チェンマイの霊媒たちの創造性は、主に、「儀礼の独立と真正性を保証する、本有的な完遂力 (intrinsic power of accomplishment)」、 「伝統的な共同体のなかの諸環境の変化に適応し、パフォーマンスに伝統を刷新する、本有的な適応力 (intrinsic power of adaptation)」、 「新たな儀礼を創造する、本有的な創造力¹⁾ (intrinsic power of invention)」からなるという。

第1章「チェンマイ、精霊信仰、霊媒術」では、現代チェンマイの霊媒術がラーンナー王国時代以来の精霊信仰と深いつながりをもつことが示される。ラーンナーの歴代の王は、土地の守護霊信仰・生魂信仰・祖霊信仰に基盤を置く都市国家ムアンの守護霊供養祭祀を統括することにより、王権の正統性を構築してきた。ラーンナーのシャム

1) 本文 p.41 では「想像力」と書かれているが、訳語の invention やその他の箇所の記述からすると「創造力」の誤りではないかと推察される。

王国への統合により、この王権の正統性が弱体化するにつれて、ムアンの守護霊祭祀におけるチェンマイ王室の祖霊供養儀礼の要素は排除されていくが、北タイの精霊信仰のかなりの部分は存続した。1970年代以降、近代化と都市化による地域社会の拡大と生業の変化に伴い、霊媒たちは新たな生産関係、アイデンティティ、社会関係に関与する傾向を強めていく。21世紀の現在、霊媒の数も増え、憑依精霊の種類や霊媒の社会的役割も多様化しているという。

続く第2章「霊媒術のセアンス——民間宗教の適応力」では、2人の女性霊媒によるセアンス（降霊儀礼）に焦点があてられる。著者が3カ月間その居宅に住み込んで調査したというA氏は、北タイの伝統的な心身観や村落共同体等のコスモロジーに即して宗教活動を行う一方、他郡や他県から地縁も血縁もない信奉者を受け入れ、事業の成功祈願や宝くじ当選番号占い等といった信奉者の現代的なニーズに応じている。チェンマイで最も数多くの信奉者が集まる霊媒の1人とされるB氏のもとには、さらに多様な地域から、1日当たり多い時で30人もの信奉者が訪れる。B氏が扱う儀礼項目は事業成功祈願等の現代的なものが大半を占める。

霊媒達はこのように信奉者のために個別にセアンスを行う一方、多くの霊媒が集まって行う集団儀礼にも参加する。第3章以降はそうした集団儀礼の記述・分析である。第3章「霊媒集団とその儀礼(1)——『インドラ神の柱』崇拝と年中行事儀礼」では、チェンマイの基柱に関する公式儀礼と、基柱の守護霊を崇拝する精霊憑依儀礼が検討される。前者の公式儀礼ではあくまで上座部仏教的価値が強調されるが、市役所の要請に応じて毎年儀礼道具の準備と管理を行うのは霊媒集団のコア・メンバーであり、準備される供物は霊媒による一般的な精霊憑依儀礼で用いられる供物と同様だという。また、霊媒達は別の日にチェンマイ旧市街北東角で基柱の守護霊を崇拝する精霊憑依儀礼を行う。これらの儀礼を通して、チェンマイ最大規模のインフォーマルな霊媒集団とその社会的紐帯が形成されているという。

第4章「霊媒集団とその儀礼(2)——霊媒集団

儀礼」は、霊媒集団と伝統的な共同体との接合、および個々の霊媒が自らの祭壇を拠点として主催する年中行事的な集団儀礼の考察である。都市化とともに衰退したと論じられてきた親族集団や村落共同体等の伝統的な共同体の精霊祭祀は、依然として実践されている。それらの精霊祭祀の中で、他地域から参加する霊媒達の集団による精霊憑依儀礼と融合しているものが少なくないことから、著者は、村の守護霊祭祀や母系祖霊崇拝が霊媒集団による精霊憑依儀礼の中で再定義されていると指摘する。また、年中行事的な集団儀礼の1つ「ヨック・クー」（師を崇拝する）に際し、霊媒達が招待する他の霊媒達の中には他郡や他県在住の者も多く、現代的な移動性を伴う霊媒のコミュニティが形成されていると述べる。さらに興味深いことに、ヨック・クーの移動性は、精霊信仰の諸ジャンルをも横断的に接合していることが示される。

第5章「母系祖霊崇拝儀礼『ピー・メン』と霊媒集団儀礼——二種類の集団憑依儀礼」では、「ピー・メン」という特別な種類の母系祖霊崇拝儀礼と霊媒術の集団儀礼が比較考察される。「ピー・メン」とは、他地域から移住してきたモンの人々が伝えたとされる祖霊信仰であり、その祖霊をもつ出自集団は数年に1度、出自集団の長の家の敷地内に建てられた精霊祠で憑依ダンス儀礼を行う。ダンスとともに随所で寸劇のような儀礼的シークエンスが演じられる。「綿花を収穫する」「タイ新年の水かけを行う」「チェンマイの侯爵がチェンマイ城に入場する」等といったこれらの儀礼的シークエンスが、それぞれ演じられる時に演奏される楽曲名とともに詳細に検討され、この儀礼はラーナー王国時代の歴史的な社会生活や社会関係を表象するものとされる。他方、新米奉納儀礼やヨック・クー等の霊媒集団儀礼では、母系祖霊や村の守護霊等の伝統的なコミュニティの守護霊に加えて、バンコク王朝の関係者等、多種多様な精霊達が一堂に会して憑依ダンスを繰り広げる。これら2種類の集団憑依儀礼は方向性こそ異なるものの、それぞれが文化的・社会的アイデンティティを再生産し、発展させることに寄与していると論じられる。

第6章「『三人の王』崇拜儀礼——新たな集団儀礼の創造とフォーマルな霊媒集団の希求」では、チェンマイ建都に関わる3人の王を崇拜する儀礼がとりあげられる。年に1度、チェンマイ旧市街の中心部に位置する市役所前の三王像広場で開催されるこの儀礼は、チェンマイ建都700周年にあたる1996年に新たに創造された儀礼である。この儀礼では、霊媒達による3人の王へのダンスの奉納のみならず、2つの母系出自集団による精霊憑依儀礼も行われ、重層的な儀礼コミュニティが形成される。初回は古都ランパーンの旧家の子孫である大学教授によって主催され、タイ政府観光庁や企業から巨額の資金が提供されたが、チェンマイの霊媒達はランパーン流のやり方を認めず、第3回目からはチェンマイの霊媒達が主催するようになった。著者は、この儀礼が国民国家の枠組みのなかで文化的アイデンティティを主張し、ラーナー王国の共同性を復興しようとするものであると論じる。さらに、この儀礼により霊媒集団のフォーマル化が促進され、霊媒の互助組織が形成されたことにも言及する。

そして終章「宗教実践の創造性とエイジェンシー」でこれまでの記述が要約され、本書の結論が示される。

チェンマイの霊媒術についてはこれまでも研究の蓄積があるが、本書は著しい社会変動の中での近年の展開を記述したモノグラフとして貴重なものである。とりわけ、祖霊祭祀や村落共同体の守護霊祭祀と現代的な霊媒集団儀礼やチェンマイの公式行事との接合等、都市化やグローバル化の影響を認めつつも、それに還元せずに宗教実践の重層性や異種混交性を描き出している点は評価できる。

他方、いくつかの疑問点も生まれた。3つ挙げておく。第1に、各章でみられる、「本有的な完遂力」「本有的な適応力」「本有的な創造力」によって構成される霊媒術の創造性が作動している、という主張には、最後まで納得することができなかった。「本有的」(intrinsic)というからには、霊媒術にこれらの「力」がもともと備わっているということになるが、そうした「力」というものがあるとしたら、それも社会的に構成された

ものなのではないだろうか。本書で繰り返される「霊媒達の宗教実践には独自の方向性が存在し、それらは必ずしも社会の承認を前提としていない」(p.87等)という記述や、霊媒術を「自律的な宗教復興現象」(p.149等)とする記述からは、実践が社会的に規定・拘束される側面が抜け落ちてしまう。また、最後に著者は「このローカルな力は、決して本質主義的なものごとを意味しているのではない」(p.271)と述べているが、「本有的」「自律的」「独自性」等の言葉を用いて繰り返される考察は、本質主義的印象を免れえない。近代化やグローバル化への還元を避けるためにこうしたローカルな事象の独自性や自律性を強調したのと思われるが、他方でグローバル化や都市化の影響も無視できない以上、その中で霊媒術の興隆を成り立たせる社会的文脈をより丁寧に分析する必要があるだろう。

このことは第2の点、すなわち理論的な主張を裏付ける民族誌的記述の物足りなさにつながる。例えば第2章では都市住民が霊媒を訪ねる目的が「事業成功祈願」「吉兆・運勢占い」「タン・ブン」等の「儀礼項目」に分けて分析され、セアンスの場が信奉者の心身の安定をもたらすと述べられているが、都市化によって人々にどんな苦悩が生じ、それに霊媒術がどう応えているのかが具体的に見えてこない。加えて、霊媒術の信奉者の多くを中間階層・下層の人々が占めていると述べる根拠や、信奉者の居住地の拡がりや裏付けるデータも具体的に示してほしかった。さらに、霊媒術は地域社会の「社会関係のコンテクスト」のなかに置かれており、その興隆がグローバル化の影響に還元できないことが強調される一方、地域社会の「社会関係」に関する記述は薄いと言わざるを得ない。また、第5章の儀礼的シークエンスの分析では、それらがどのような儀礼的表象として機能しているかが考察の中心となっているが、パフォーマンスや実践を論じるのであれば、これらの儀礼の行為主体に焦点を当てるべきではないだろうか。

そして第3に、(とりわけ「三人の王」崇拜儀礼等の公式的)儀礼の復興・継続・創造といった現象に関しては、タイで1980年代に「コミュニティ

文化 (*watthanatham chumchon*)」, 1990 年代以降「土着の知恵 (*phum panya*)」をキーワードとして展開してきた思想・運動[重富 2009]の影響が無視できないのではないか。霊媒術の展開をこうした国家規模の社会的文脈に位置づけると, 近代化・グローバル化と宗教復興との関係をより重層的に論じることができたのではないかと思われる。

多元的・創造的に変化を遂げるチェンマイの霊媒術について, 今後さらなる研究が蓄積されることを期待する。

(飯田淳子・川崎医療福祉大学医療福祉学部)

引用文献

重富真一, 2009. 「タイにおけるコミュニティ主義の展開と普及——1997 年憲法での条文化に至るまで」『アジア経済』50(12): 21-54.

小河久志, 『「正しい」イスラームをめぐるダイナミズム——タイ南部ムスリム村落の宗教民族誌』大阪大学出版会, 2016, ix+260p.

本書は, タイ南部トラン県にある人口約 1,000 人のムスリム村落「M 村」を対象に, 2000 年代前半に行われたフィールドワークにもとづく民族誌である。著者の博士論文をもとにしており, 加筆・修正のうえで本書が刊行された。

著者はまず, 序章から第 2 章にかけて, 北インドで興された, イスラームの改革・復興を目指して布教に取り組む組織タブリーギー・ジャマアト (以下, タブリーグ) が, 1980 年代以降にタイで活躍したことをイスラーム復興現象の一環としてとらえ, この組織の村落, 国家, トランスナショナルな次元での位置づけを見ることにより, 人類学的イスラーム研究, 東南アジアのイスラーム研究, タイ研究の三つの領域を相互に関連させつつ, 「動的かつ総合的」な視野を切り開くという, 本書の立場を打ち出している。

次に著者は, タブリーグが M 村のイスラームの宗教リーダーと結びつき, 村の成人男性に対し「義務」としてダツワ (宣教) に加わるよう, 積極的に働きかけていることを指摘する。その結果,

(a) 公的な宗教リーダーでもあり, かつ, タブリーグの活動にも熱心な「ダツワ・グループ」, (b) ダツワにコミットはするがタブリーグの活動を「義務」とまではみなさない「新しいグループ」, (c) タブリーグの活動に否定的な「古いグループ」, という三つのカテゴリが村内に出現したのだという (第 2 章)。

著者はさらに, この 3 グループの差異が, イスラームの知識や理解をめぐる他の脈絡 (宗教教育, 民間信仰) においても顕在化したことを指摘する。この村の「超自然的信仰」(船霊, 始祖の霊, 親族の霊に対する信仰) が「宗教」なのか「慣習」なのかをめぐる判断が, 3 グループそれぞれにより異なるのだという。即ち, 「古いグループ」は信仰対象によって「慣習」と「宗教」の区別を使い分け, 両者を併存させていたが, 「新しいグループ」は, 「古いグループ」のいう「慣習」も実はイスラームにもとづくものとみなす立場をとり, 「ダツワ・グループ」は, 「慣習」を否定し, それは「悪行」であるとみなして批判的な姿勢をとったのだと, 著者は整理している (第 4 章)。

ところが, 2004 年のスマトラ沖地震による津波被害が, 信仰の変容を引き起こしたと, 著者は議論を進める。「ダツワ・グループ」による, 津波は天罰であるとの解釈が村全体に影響力を強め, 「古いグループ」はそれまでの「慣習」を「イスラーム的」な仕方実践するようになるなど, 全体的にイスラームへの志向性が強くなった側面があると著者はみている。その一方では, 「新しいグループ」は, それまで「イスラーム的」な仕方「慣習」を実践していたのを, 旧来の形式に「復古化」して行うようにもなったのだという (第 5 章)。

こうした民族誌的知見をもとに, 著者は終章において, 2004 年の津波以後に見られた動向は, かつて E・ゲルナーが提示した, 民間信仰隆盛の極と一神教の志向性強化の極との間を振り子のように揺れるムスリム社会というモデルでは論じきれないと指摘する。むしろ, 村の人びとは「信仰対象の掛け持ち」(p. 222) のようにして, イスラーム的な信仰と民間信仰を並行的に実践しているのだと, 著者は総括する。

このように整理すると, 本書が, まずは人類学

的イスラーム研究の成果を踏まえ、先行研究との学的一貫性を保つ構成をとっていることがわかる。序章におけるレッドフィールドの「大伝統／小伝統」論からエル＝ゼイン、さらにはアイケルマンやロフといった研究者の援用は標準的な手続きに則っている。著者は、ローカルな次元とローカルを超えた次元の双方を重視するこれらの諸研究を、国家やトランスナショナルな次元、すなわちタイ政府の宗教行政・宗教教育やタブリーの諸活動の事例において検討している。その点で、本書は既存の人類学的イスラーム研究に掲げられていた問題系にタイ南部のフィールドから応答した、実証的かつ実直な試みとして正当に評価されるべき著作である。

特に、2004年の津波後の変化に関する議論は興味深い。著者の整理から、M村の全体状況としては、「古いグループ」の人びとが「イスラーム的」な信仰の領域を拡大させ、一方では「新しいグループ」の人びとが「非イスラーム的」「慣習的」な信仰の領域を拡大させたことがわかる。とりわけ後者は、これまでの人類学的イスラーム研究ではうまく扱いきれない現象と言える。本書の事例にことよせた形で言うなら、従来のこの種の研究では、「ダッワ・グループ」の人びとが村人の宗教実践の一部を「悪行」であると批判し、「慣習」をイスラームに一元化させてゆくような動向に注目する傾向があったからである。しかし、「非イスラーム的」「慣習的」な信仰領域の拡大が同時に生じているという指摘は新鮮である。

このような宗教実践をめぐる錯綜した状況は、何とかして津波による被害を克服し、かついつ襲って来るやもしれぬ津波を避けようとする村人の切実な試みの総体であった。それはまた、アッラーに献身するだけでは満たされない村人の心理的状況を反映したのもでもあったとも言える。(p.222)

評者にとってこの一節は、著者がイスラームに関する民族誌的記述を通して人びとの「生き方」とでも言うべき領域に最も近づいたと見える箇所であった。このように記した時、著者は本書前半部

分にみるような、イスラームをめぐる文化形式の多元性や動態について叙述する次元を一步踏み越え、人びとの「生き方」の側からイスラームを見ているように思われた。慣習をイスラーム的に仕立てた「古いグループ」の人びとも、旧来の形式のもとで儀礼を行うようになった「新しいグループ」の人びとも、両者ともに経験した津波後の暮らしの切迫感が、著者に上記の表現をとらせることになったのではないかと、評者は想像したのである。

また、「ダッワ・グループ」の人びとが「古いグループ」を批判する際の言葉遣いは「悪行」であるが、「新しいグループ」の人びとが「古いグループ」の人びとを批判する時、「彼らはイスラームを知らない」(p.154)と言ったことが、著者によって書きとめられている。この点についても評者は興味を引かれた。「新しいグループ」の人びとはダッワには参加するが、しかし、その活動が「ダッワ・グループ」の主張する「義務」の次元にまで高められることには違和感を表明するのだという。例えば、「ダッワ・グループ」の人びとが喫茶店でダッワへの参加をうながす話を始めたとき、「新しいグループ」の人びとの何人かは席を立ち、その場を去ったと書かれている(p.81)。これは、ある次元まではダッワ・グループに従い、その権威を受け容れつつも、しかし、自前の立場から離れないところが、「新しいグループ」には認められるとらえてよいものと思われる。

これらはいずれも、小さな声、小さな心の動き、小さな所作である。そのせいか、著者はこれらの点を正面から分析に組み入れることはしていない。しかし、こうした「新しいグループ」の動向は、従来の研究に照らした際、重要な意味を持つと考えられる。これまでのイスラーム復興の(例えばアラブ世界での)研究においては、当のムスリム自身が問題化する、共同体の中のイスラーム的「逸脱」が取りざたされてきた。この、「逸脱」を批判するロジックが、もし「ダッワ・グループ」の発する「悪行」という言い方とおおむね並行的だとすれば、「新しいグループ」が「ダッワ・グループ」と微妙な距離を取りつつ発する小さな声には、独特の興行きが備わっていると評者には見

えた。その声には、「悪行」「逸脱」を批判するグループのイスラーム理解にも、また、その批判行為にイスラーム復興の特徴を見出す従来の研究者の理解にも還元しえない、独自の世界があると思えるのである。

これは、ひとつには「ダッワ・グループ」が、「悪行」という批判をしつつも、それ以上踏み込んだ直接的な批判を避けているが故かもしれない。このグループの抑制的な姿勢が、他方で、「新しいグループ」が自前の宗教的行為を発達させる宗教的空間の余地を生みだしていると考えerことはできないだろうか。

さらに、「ダッワに行く」(p.2) と言って出掛けた人びとが警察署を襲撃するという、本書冒頭のエピソード(ただし M 村の例ではない)にも評者は着目したい。これは、タブリーグが一般に「穏健派」として知られるがゆえに、この組織に関連して現れた事態としては異例のことに思える。穏健派の代表格から暴力が生成するとはどういうことなのかと、評者は興味を持った。しかし、これまでのイスラーム復興の議論で指摘されてきたように、「逸脱」による批判のロジックが、「逸脱」とみなされた慣行や存在の力による排除にまで至ったことを想起するなら、「ダッワ・グループ」による「悪行」批判のまなざしの中にも、暴力につながる要素があると考えerことはできないだろうか。

もしこの想定が妥当であるならば、「悪行」という批判の仕方を取らない「新しいグループ」の身振りは、もうひとつのイスラームの態度のありかを示唆しているのかもしれない。そして、その態度の延長線上に津波後の民間信仰再生もあるのだとすれば、本当に「穏健」なものを生成しているのは、タブリーグよりも、むしろ村の多数派を占める「新しいグループ」の生活感覚なのではないのか、という問題が開かれてくると評者は考えた。ならば、著者が M 村で見いだした「新しいグループ」は、イスラームをその一部としながらもそれを包み込んで広がる生活感覚の存在を我々に示しているのであろうか。こうした点に関する著者のさらなる探究を待ち望むとともに、その萌芽に立ちあえたことが、評者にとって本書を読む醍醐味

であった。

(池田昭光・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

乗松 優. 『ボクシングと大東亜 —— 東洋選手権と戦後アジア外交』 忘羊社, 2016, 320p.

近年、東南アジア地域研究のなかでスポーツを扱った重要な著作が刊行されている [Kitiarsa 2005; 2013; Creak 2015]。それらの研究は地域研究ではどちらかといえば等閑視されてきたスポーツを事例に、国家の存立機制を抉り出す点に特徴がある。マンダラ国家から国民国家へと転換を図る過程で、いかに臣民の身体の規律訓練が果たされてきたのか。いかに人口学や衛生学と手を結びながら、国民の健康問題が社会防衛論的に構成されてきたのか。いかに異性愛を前提にした両性の分割が、国家理性の保守に貢献してきたのか。一見取るに足らない対象であるように見えるスポーツが、実はこうした国家機軸の深部に届いていることを浮かび上がらせる点に、それらの研究の力点はある。

本書もまた、スポーツを事例に新たな歴史認識を提起する野心的著作である。事例として取り上げられるのはボクシングで、日本とフィリピンの文化交流史を描き直そうとするものだ。日本とフィリピンの国交が断絶していた 1950 年代に、ボクシングの東洋選手権は開始された。本書は外交に先立つスポーツ交流の歴史を紐解きながら、「帝国の秩序が厳格な政治支配からソフトパワーによって調整される時代」(p.30) において、いかに東洋選手権が「日本とフィリピン間における外交の膠着状態を解消する突破口となった」(p.256) のかを明らかにするものである。

本書がユニークなのは、この交流史を描出する上で「アウトロー」(p.87) の世界に着目したことだ。ボクシングはスポーツイベントであると同時に興行でもある。その興行師たちは「海千山千」(p.89) の者たちであり、ときには裏社会とも通じながら、東洋選手権の開催に尽力してきた。日本のボクシングコミッションや主要テレビ局もまた、アウトローとの密接な関係のなかで仕事をしてき

た。正史からは除外されがちなアウトローへの着目から、本書は戦後日本のもうひとつの復興過程を捉え、そこに日比交流史を記述する足場を設定するのである。

本書で登場するアウトローでも特に重要なのが、ロッセ・サリエルと瓦井孝房の二人である。ロッセ・サリエル（1905～95）はジャズ・ミュージシャンであった。音楽活動を通じて上海からグラム、合衆国まで行き来していた彼は、やがて音楽だけでなくボクシングにも携わるようになる。そしてフィリピンを代表する大プロモーターになり、東京の五反田に土地を買い「バンブーグローブ」というフィリピン・レストランも経営した。そのサリエルの下で、ビジネスパートナーとして活躍したのが瓦井孝房（1925 ないしは 1926～2005）だった。彼は銀座を根城にするヤクザであり、サリエルの日本での興行をサポートして、数々のボクシング興行を成功させた。

アウトローに生きた個々人の生活史を資料やインタビュー調査によって掘り起こし、かれらの人生がいかに戦後日本のテレビ局の開設や岸信介の外交戦略と絡み合っていたのかを説き起こすのが、本書の醍醐味である。そして個人に注目することで、東南アジア地域研究で近年登場しているスポーツ研究とは方法論的に異なる地平を切り拓く可能性も秘めている。すなわち、国家の存立機制を抉出する視角ではなく、アジア太平洋を横断しながら、ある意味アナーキーに展開した人的ネットワークの宇宙を描出すること（実際、本書では日本とフィリピンのみならず、ハワイでのインタビュー調査の内容が掲載されている）が可能になってくるのである。ベネディクト・アンダーソンは『三つの旗のもとに』[2012]で、19世紀後半に世界各地で活躍した移民アナーキストに注目することで、ナショナリズムとインターナショナル主義の相克を捉えたが、本書もまた興行師たちの国際主義を浮かび上がらせるような仕事であると言えよう。だがこの点は、後に立ち返るとして、先に本書の構成を確認しておきたい。

*

本書の章構成は以下の通りである。

- 序章 忘れられた栄光
- 第一章 「帝国」の危機とスポーツ
- 第二章 日比関係はいかにして悪化したか？
- 第三章 興行師たちの野望とアジア
- 第四章 テレビ放送を支えた尊皇主義者
- 第五章 岸外交における露払いとしての東洋チャンピオン・カーニバル
- 第六章 ボクサーにとっての東洋選手権
- 第七章 戦後ボクシングと大衆ナショナリズムの変容
- 終章 「大東亜」の夢は実現したか？

よく練られた構成である。スポーツのように発展途上の対象を扱う際に苦慮するのは、それをどのような主題的広がりの中かに収めるかという点だ。たとえばボクシングの東洋選手権を論じるならば、ボクシングの受容と普及の過程に特化したリ、あるいはアジアのスポーツの発展過程に位置づけて「スポーツ史」に限定して書くことも可能である（しかしその場合、探究は狭隘なものに落ち着く）。だが本書は、もっと広いキャンパスの中に東洋選手権を放り込もうとする野心的な著作であることが、上記の目次からも見て取れるだろう。本書はスポーツ研究であると同時に、より広範な日本近現代史の範疇を念頭に置いた書き物であると言えよう。

内容については、目次の用語を拾っていくと理解できる。大東亜共栄圏という理念の崩壊とそのなかでのスポーツの機能（一章）、フィリピンに対する日本の占領政策の失敗と対日感情の悪化（二章）、戦後日本で暗躍した日比の興行師の活動（三章）、日本におけるテレビの普及過程とその中心人物の勤王・愛国主義（四章）、冷戦体制の急所を突くかたちで展開された岸政権の東南アジア外交（五章）、政治家とも興行師とも異なりを見せた日本人ボクサーの交流経験（六章）、日本のボクシングがフィリピンを模範としながらもそれを追い抜く過程とナショナリズムの絡み合い（七章）、全体のまとめ（終章）という内容である。

本書はボクシング東洋選手権の意義を考えるに

あたり、「興行師」(三章)、「テレビ」(四章)、「岸外交」(五章)、「大衆ナショナリズム」(七章)から考えようとしている。アウトローの興行師、テレビの発達とその中心人物、文化外交を考慮した岸信介政権、フィリピンの先に「西洋」を見つめフィリピン選手を倒すことが「西洋」を打倒することであると解した日本の大衆ナショナリズム。こうした内容が連鎖しながら、「東洋選手権という名の国際スポーツ交流の歴史的意義」(pp.17-18)が示され、とりわけ「ボクシングのグローバル性こそが、外交問題の解決に先駆けて、フィリピンとの間に友好や親善を果たした」(p.157)点が論述される。またそれは同時に、戦後日本が「引き裂かれた日本のナショナル・アイデンティティを取り繕う」(p.253)過程でもあったが、そのためには「フィリピン人ボクサーの手を借りねば」(p.253)ならなかった。

*

このように本書は、ボクシングを事例に日比文化交流史を描いたものである。関連する主題領域の押さえ方にしても、アウトローたちの裏社会を含めた事実の押さえた方にしても、手堅くかつ想像力ある仕上がりとなっている。また記述の方法論についても示唆的かつ問題提起的であり、さらなる議論を呼び起こすものであることが間違いない。私が著者と議論をするならば、次のような点をぶつけてみたい。

ひとつは、個人に着目する歴史記述についてである。本書の登場人物にはすべて生年・生没年が記載されている。この点を調べるだけでも膨大な作業が必要だったと思うが、国や地域を越境するネットワークの中で活躍する興行師やボクサーの姿が見えてくる。サリエルは東京や横浜で暗躍したし、瓦井も亡くなったのはマニラであった。この二人と交流があり、現在、ハワイに暮らす日系二世のスタンレー・イトウの語り(p.74)も興味深い。こうしたネットワークが形成されたのは、著者も言うように「ボクシングのグローバル性」(p.157)ゆえであるだろう。

しかしだからこそ、本書が後半に進むにつれ、

こうした個々人の生の軌跡から離れて、戦後日本のパースペクティブからの記述へと収斂していったのはなぜかと、私は考えることになった。たとえば、七章では「ボクシング先進国であったフィリピンとの対戦を通して、肯定的な日本の自己像がいかに回復されていったのかを明らかにしてみたい」(p.221)と課題が設定されている。また、序章においても「プロボクシング東洋選手権は、敗戦によって打ちひしがれた日本人のアイデンティティを救済したと言っても過言ではない役割を担っていた」(p.18)と書かれている。つまり、個々人の生活史とネットワークを丁寧に押さえて歴史記述を試みながらも、最終的には戦後日本の時空に特化して「日本人のアイデンティティ」の観点から物語がまとめられているのが、やはり気になるのだ。そのため終章で述べられる「東洋選手権は占領や戦争といった過去を乗り越え、未来に開かれた対話の一プロセスであったと捉えることができるかもしれない」(pp.256-257)という一文も、この「対話」にフィリピンサイド(や日系移民)のパースペクティブが入っているのかどうか再考する余地があるように思う。すなわち、本書は文化交流史を描出しているが、それは「戦後日本のパースペクティブからの」文化交流史であるという限定性があるのではないか。個人に丁寧に目を向けることで、本書は比較社会的地平での交流史研究を提示する可能性を秘めているように思う。だが、その達成を前に、「敗戦後の虚無感をスポーツによって埋め合わせしようとした」(p.261)という「日本のアジア回帰」(p.18)に特化して全体をまとめたことの含意について、著者とはぜひ議論してみたい。

もうひとつは、「ボクシングと大東亜」にまつわる女性の経験についてである。ボクシングは男性性を強調する競技であり、ボクサーには圧倒的に男性が多い。しかしながら、本書のように、ボクサーのみならず、興行師や政財界まで視野を広げてみるならば、そこには様々な女性たちのネットワークやそれにもとづく経験もあるのではないか。たとえば第三章で登場するラウラ・エロルデの語りは、本書では父ロッペ・サリエルについて説明するものに限って引用されている。だが一方で、

彼女は日本のボクシング界のドンであった本田明 (p. 72 の写真を参照) のパートナーであった長野ハルとの間に、固い友情とビジネス上の紐帯を育んでいた。そして、ラウラはサリエルとフラッシュ・エロルデの亡き後にフィリピンのボクシング界で非常に重要な役割を果たしてきたし、長野は本田亡き後に帝拳ジムを切り盛りして日本のボクシング界に多大な貢献をした。これらの逸話は、ボクシングの世界では有名なものであり、著者が知らなかったとは想定しづらい。もとより一冊の本で書ける内容は限られているため、本書からは省いたのかもしれないが、しかし「ボクシングと大東亜」に纏わる女性の経験を組み込むならば、より立体的に記述が構成されたのではないか。たとえば、女性の動きに注目することで、銀座や横浜でのアウトローの世界とボクシング界とのつながりを、より具体的に捉えられるようにも思う。

重要な著作とは、完結した作品のことでなく、さらなる議論を呼び起こす作品のことであるはずだ。本書はその意味において重要な著作であるが、ここで呼び起こされた数々の議論が、今後学術研究としてリレーされることを望む。

(石岡丈昇・北海道大学大学院教育学研究院)

引用文献

- アンダーソン, ベネディクト. 2012. 『三つの旗のもとに——アナーキズムと反植民主義的想像力』山本信人 (訳). 東京: NTT 出版. (原著 Anderson, Benedict. 2006. *Under Three Flags: Anarchism and the Anti-Colonial Imagination*. London and New York: Verso.)
- Creak, Simon. 2015. *Embodied Nation: Sport, Masculinity, and the Making of Modern Laos*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Kitiarsa, Pattana. 2005. 'Lives of Hunting Dogs': *Muai Thai* and the Politics of Thai Masculinities. *South East Asia Research* 13(1): 57-90.
- . 2013. *Of Men and Monks: The Boxing-Buddhism Nexus and the Production of National Manhood in Contemporary Thailand*.

New Mandala. October 2. <http://asiapacific.anu.edu.au/newmandala/2013/10/02/pattana-kitiarsa-on-thai-boxing/>. (2016年11月11日最終アクセス)

中村正志. 『パワーシェアリング——多民族国家マレーシアの経験』東京大学出版会, 2015. vii+298p.

I 本書の内容

エスニックな亀裂によって分断された社会では、エスニック集団の間の対立を穏健なものにし、多数派の専制に陥らずに少数派の意見を如何にして政治に反映させていくかが常に課題となってきた。そのための方策として様々な社会で長年試みられてきたのが、「主要エスニック集団による執政権の分掌」であるパワーシェアリングの仕組みである (p. 3)。新興国においては独立後にパワーシェアリングが試みられた例が少なくないが、そのほとんどが機能不全に陥って数年のうちに姿を消している。

エスニック研究の視点からは、本書が事例研究の対象とするマレーシアの社会は、エスニックな亀裂が交差するのではなく重複し、エスニック集団間の勢力が拮抗した社会であると分類されてきた。具体的には、マレーシア社会には多数派のマレー人と、少数派の華人およびインド人などマレーシア研究で言及される「民族」(bangsa) のラインに重複する形で言語、宗教、階級、職業、居住地といった亀裂が走り、社会が分断されてきた。

マレーシアでは主要なエスニック集団を構成する多数派のマレー人が独立以降は総人口の5割から6割を占めてきたが、主に少数派の華人がマレー人よりも経済的に優位にあったために、マレー人と華人を中心とする非マレー人との間で妥協が図られてきた。その妥協を現実のものにしていく仕組みが、主にエスニック集団に基づいて結成された複数の政党が参加する与党連合による統治である。独立以来続いてきた与党連合による統

治の中核には常に多数派のマレー人を主な支持基盤とする統一マレー人国民組織 (United Malays National Organization: UMNO) が君臨してきた。その一方で、UMNO のライバルとして同じくマレー人を支持基盤とする野党の汎マレーシア・イスラーム党 (Parti Islam SeMalaysia: PAS) が存在し、マレー人からの支持を獲得しようとして長年対立してきた。

社会が重複するエスニックな亀裂によって分断されている中で、政治はパワーシェアリングの典型ともいえるべきエスニック集団をベースとする複数政党が参加する連立政権によって担われる。その一方で多数派エスニック集団を支持基盤とする与党に同一の支持基盤を持つ野党が対抗している。こうしたマレーシアの社会と政治の状況は、エスニック研究、紛争研究やそれらと関連する政治学の先行研究が築き上げてきた理論のレンズを通してみれば、複数の多数派集団を代表する政党同士がライバル政党に競り勝つことを目指して少数派を犠牲にするような急進的政策を掲げる「アウトビディング」が起り、結果としてパワーシェアリングが容易に崩壊してしまう例と考えられるはずである (pp. 39-40)。しかし、現実にはマレーシアは新興国の中でもパワーシェアリングが独立以降半世紀以上続き、エスニック集団間の対立の激化が抑制されてきた例外的な事例である。そこで、本書冒頭に紹介されているマレーシアのナジブ首相とアメリカのヒューズ国務次官との会談でのコメントのように一部外交筋の間では、マレーシアがパワーシェアリングによる紛争管理のモデルであるとの見方もでてくる。こうした事例としてのマレーシアの前提と理論的考察を踏まえつつ、本書は特に選挙と多数派集団の与党に着目して、「『多数派民族集団の政党が少数民族集団の利益を尊重するのはなぜか』という問題に関する新たな知見を提示することをめざし」している (p. 6)。

この目的を追求するうえで、本書は具体的な 2 つの問いとそれらへの仮説を設定することで取り組むべき課題をより明確にしている。第一の問いは選挙を通じて如何にしてパワーシェアリングを生み出すかという問題であり、「どのような場合に異民族政党間の票の共有 (vote pooling) が生じる

のか」という点が問われる。第二の問いは多数民族与党がアウトビディングをどのように防ぐかという問題であり、「多数派民族政党の指導者は、どのような場合に党内の異論を抑えて穏健政策を実施できるか」という形で問いが立てられる。

この 2 つの問いに対して本書はモデルから演繹的に次のような仮説を抽出した。第一の問いに対する仮説は、「異なる民族の政党が、選択投票制 (Alternative Vote: AV) のもとで政策的に歩み寄ったとき、ないし 1 人区相対多数制 (First Past The Post: FPTP) のもとで統一候補を擁立するとき、民族混合選挙区の数が十分多ければ票の共有の効果が期待できる」(仮説 1) である (p. 9)。第二の問いに関する仮説は、「多数派民族政党において、党首以外の幹部ポストの価値が高いほど穏健政策がとりやすい」(仮説 2)、「多数派民族政党において、党首と対抗エリートのポストの価値の差が小さいほど穏健政策が採用されやすい」(仮説 3)、の 2 つからなる (p. 9)。

本書の行論はこの 3 つの仮説をマレーシアの事例を通じて検証する形で進む。結論として、仮説 1 および仮説 2 は検証できたものの、仮説 3 は検証できなかった。仮説 1 をマレーシアの事例に当てはめてみれば、選挙制度に FPTP を採用するマレーシアでは民族混合選挙区が十分な数あり、そこで与党連合の統一候補が立てられて異民族与党間で票の共有が行われているからこそ与党連合はこれまで優位を保ってきた。仮説 2 の検証の過程で地方制度、議会制度、政策決定と人事にかかわる UMNO の制度を検討した結果、党首以外の閣僚、議員、地方組織幹部らは、党首と比較すると小さいが、それでも付帯利益の面にみられるように「金持ちになるには政治家になるのが近道」といわれるほどポストに付随する大きな利益を享受していた。また、UMNO の党幹部の多くが異民族間での票の共有の恩恵を享受していることが分かった。その一方で仮説 3 の検証過程からは、マレーシアの執政制度がイギリス型の宰相システムで、執政府において首相=UMNO 総裁が強い権限を握るだけでなく、党内人事でも総裁が広範な裁量権を握るシステムのため、首相=UMNO 総裁のポストの価値が抜きんでいることが分かった。

そして、UMNO 総裁はレントの供給などを通じて、地方幹部ポストの価値を高めることで党内支持を確保してきたこと、総裁ポストをめぐる競争の「掛け金」が高いことが、対抗エリートの総裁への挑戦を促す要因となってきたことが示唆される。

他方で、2008年総選挙では従来はみられなかった変化が起こった。特に野党間で民族的イシューが背景に退いて異民族政党間の協力が進むとともに、与党連合が大きく議席を減少させたのである。この原因として本書ではインターネット利用の急速な拡大で与党の政治宣伝の効力が削がれ、与党による票の共有の効果が薄れたことが示されている。

本書は最後にマレーシアのパワーシェアリングの経験がエスニック紛争管理のモデルになり得るかとの問いにも答えようとしている。本書の考察からみえてくるのは、歴史を振り返れば、一連の制度導入の順序や組み合わせがパワーシェアリング政権の安定性に重要であり、特定の経験を他国が丸ごと模倣するのは困難であるとの結論である。さらに、事例としてのマレーシアのパワーシェアリングの安定性は、首相=UMNO 総裁への権限の集中と彼が党幹部を懐柔する手段としてのレントの供給に依存してきたものであり、「政治権力の正統性を左右しかねない争点を、利益分配の問題に置き換える」操作を通じて維持されてきた (p. 257)。そのためマレーシアでは民族的イシューではない汚職・金権政治と市民的自由の統制といった異なる対立軸の構築が長年妨げられる結果にもなってきたと指摘される。

II 本書の評価

本書の最大の特長は近年体系化が進んできた政治学のリサーチ・デザインに基づいて、理論モデルを通じた考察から演繹的に仮説を提示し、マレーシアの経験的事例から検証を行い、さらには一般理論への貢献を目指すそのスタイルにある。こうした研究スタイルはマレーシアを対象とした研究では一部の例外を除いてこれまでほとんどみられなかったものであり、本書の先駆的な研究スタイルは非常に大きな意義を持っている。

問題の所在と仮説の提示を行った第1章と第2章のあとの各章では、計量分析、歴史分析、制度分析といった異なる研究のアプローチを複合的に採用する一方で、マレーシア政治に関わる重要なデータが豊富に示されている点も見逃せない。第4章と第8章では選挙やメディア受容に関わる豊富な計量データを用いた選挙分析がなされる。第5章では制度論的観点から首相=UMNO 総裁および、UMNO 党幹部ポストの価値がはかられるほか、上院や廃止された地方自治体選挙制度についても言及されるのは注目すべき点である。さらに、第3章、第6章、第7章で展開されたマレーシアの政治史の綿密な記述は今後のマレーシア政治研究の基本文献として参照されるべき価値を持っている。

本書が冒頭で掲げた「多数派民族集団の政党が少数民族集団の利益を尊重するのはなぜか」という問いについては十分に解明できていると考えられる。ただしその一方で、本書には十分語られなかった今後の研究に期待すべき点や若干の改善が必要な点もないわけではない。

本書はリサーチ・デザインの段階で多数派民族政党に議論を集中させ、少数民族にあたる華人やインド人、ボルネオ島の政党には言及しないことが述べられる (p. 12)。とは言え、パワーシェアリングの起源にあたる1940年代から50年代の独立期を扱った第3章と、1969年の民族暴動(5.13事件)を経てパワーシェアリングの制度組み換えが起こった時期を扱った1970年代前半の第6章では、先行研究も参照しながらマレー人と与党UMNOだけでなく、華人とインド人の与党の動きや、与党連合内での異民族政党間の交渉過程にも一定程度言及されている。しかし、1980年代以降の政治史にあたる第7章では華人とインド人の与党への言及はほとんどなくなり、UMNO内の抗争のみでマレーシアの政治史が展開していく(ようにみえる)。本書は先行研究への批判として第6章で5.13事件以降にパワーシェアリングが破綻したのではないと結論づけた。しかし、1970年代以降は破綻ではなくとも従来のパワーシェアリングの仕組みが段階を経ながら徐々にUMNOに有利なものへと質的に変容を遂げていった点は確実であろう。本書

は国際比較の観点からは例外的ともみえるマレーシアのパワーシェアリングの継続性の要因を明確に示すことができた一方で、変容の実態、過程や要因については継続性ほど十分な議論が展開できていないように思える。

この指摘とも関連するのが、2008年総選挙の評価にあたる第8章である。2008年総選挙で票の共有が失われて与党が優位を失ったのは、インターネット利用拡大によって政府・与党による争点操作が失敗したことが要因であるとされる。しかし、この議論の導入は前章までの綿密なリサーチ・デザインに沿った行論と比べると、本書が当初想定したモデルの外生的要因の変化であることもあって、読者はいささか唐突感を感じざるを得ないのではないだろうか。この議論を構成する重要な要素は、第8章で検証されたインターネットの効果とともに、マレーシアでは政府・与党のメディア統制による争点操作が長期のパワーシェアリングや与党体制の継続を大きく左右してきた（加えて、少なくとも政府・与党はそうした認識のもとでメディア統制を行ってきた）との前提である。本書でこの前提を支えるのは先進国で発展してきたマスコミュニケーション研究の理論の一般的な仮説にとどまっている（pp. 227-228）。一般理論の仮説だけでこの前提を追認するのは不十分であるとともに、もう少し丁寧な説明が必要だったのでは

ないか。

以上は、本書が想定する当初のリサーチ・デザインを踏み越える点でもあり、無い物ねだりの感がないわけではない。むしろ、パワーシェアリングやそれと関連したメディア統制の変容という側面は本書のあとに続く研究が今後深めるべき論点でもある。

その一方で、若干の改善が必要と思われる点が2点ある。最初の点は、仮説2と3の検証で議論となったUMNOの党幹部ポストの「価値が高い」とか「価値の差が小さい」といった言葉について何を基準にしているのかが不明瞭な点である。

2点目として本書には「エスニシティ」および「エスニック集団」と、「民族」という用語が混在しており、定義や使用の際の条件について十分な説明がなされていないために読者の混乱を招くのではないかと懸念される点もある。

しかし以上のような書評者の指摘は些細なものであり、本書の価値を損なうものでは全くない。本書はマレーシア政治を研究対象としながら、事例を超えるパワーシェアリングをめぐる一般理論への貢献を目指す野心的な試みであり、新興国の政治に関心のある読者一般に広く読まれるべき著作である。

（伊賀 司・京都大学東南アジア地域研究研究所）